

子由しゆうの澗池べんち懐旧かいきゆうに和わす（蘇軾そしよく）

人生じんせい 到いたる 処ところ 知しんぬ 何なににか 似にたる

応まさに 似にたるべし 飛鴻ひこうの 雪泥せつでいを 踏ふむに

泥上でいじょう 偶然ぐうぜん 指爪しそうを 留とどむるも

鴻こう 飛とんで 那なんぞ 復また 東西とうさいを 計はからん

老僧ろうそうは 已すでに 死しして 新塔しんとうと 成なり

壞壁かいへきには 旧題きゆうだいを 見みるに 由よし 無なし

往日おうじつの 崎嶇きくたるを 還なお 記きするや 否いなや

路みち 長ながく 人ひとは 困くるしみ 蹇驢けんろ 嘶いなくを

人生到處知何似 應似飛鴻踏雪泥
泥上偶然留指爪 鴻飛那復計東西
老僧已死成新塔 壞壁無由見舊題
往日崎嶇還記否 路長人困蹇驢嘶

解説 二十六歳の時、鳳翔府ほうしやうふ簽判せんぱんの任に赴く途上、弟の轍てうの「澗池を懐いて子瞻しぜん兄に寄す」の詩に和して作ったもの。

語釈 ※子由しゆうの弟の轍てうの字。 ※泥池でいぢ 河南省洛陽の西六十キロの所にある。
※懐旧かいきゆう 昔をしのぶ。 ※知何似ちかへに 何にたとえてよいかわからない。 ※鴻こう 水鳥。
※那なん 何と同じであるが、ややくだけた感じ。 ※老僧ろうそう 五年前に世話になった老僧で、名を奉閑ほうかんといった。 ※新塔しんとう 僧が死ぬと火葬して、その骨や灰を石塔に蔵した。 ※旧題きゆうだい 五年前に、書きつけた詩。 ※往日おうじつ 父に伴われて旅した日のこと。 ※崎嶇きく やまみちのけわしく歩きにくいこと。 ※記き 記憶する。
※蹇驢けんろ びつこのロバ。

通釈 人生のさすらいは、一体、何に例えたものだろうか。それは舞いおりた雁が雪だけの泥水にひよいと足を踏むようなものだ。泥の上には、たまたま足あとを残してはいるが、雁が飛び去ってしまえば、もうどっちへ行つたかわかりはしない。老僧はすでになくなつて、新しい塔に入つてゐるし、くずれた寺の壁には、かつて書きつけた筆の跡を捜すすべもない。君はあの日の山路の旅の苦しさを今もなお覚えてゐるかい。果てしなく続く旅路に、旅人はつかれ、びつこのロバがしきりに嘶いなないていたことを。